

【書評】

種橋征子 著
『介護現場における「ケア」とは何か
—介護職員と利用者の相互作用による「成長」—』
(ミネルヴァ書房, 2017年, A5判, 352頁, 6,480円)

石 附 敬
(東北福祉大学)

1. はじめに

本書は、種橋氏の博士学位論文「介護老人福祉施設の介護職員と利用者の中で展開される『ケア』の概念の研究—ケアプロセスにおける互いの『成長』に着目して」を基に加筆修正が行われ出版されたものである。種橋氏は、1993年から高齢者福祉事業の現場に従事し、介護保険制度施行の前後において、さらに現在に続く高齢者ケアの現場の変化を体験し、その中から本書の研究につながるテーマの着想を得ている。

著者の問題意識は、介護保険制度の導入により、高齢者介護の現場に市場原理が導入され、効率性や利益の追求が行われる中で、介護の道具的な援助の側面が強調され本来必要とされる介護福祉の価値や思想が軽視あるいは理解されていない現状を批判している。また、それに対して、「ケアの概念」を介護現場における介護職員と利用者関係に存在する事象から明らかにし、この概念を介護職員が理解し、実践に生かすことで介護福祉や介護を必要とする高齢者の生活の向上を目指している。

介護保険制度が導入される前後において高齢者介護施設で勤務していた経験を持つ評者としては、著者の主張に共感する部分が多く、大変興味

深く読ませていただいた。

以下、本書の構成に従って概要の紹介をしよう
えて、評者のコメントを記す。

2. 本書の概要

本書は三部構成になっている。第一部では、本研究の意義と目的、ケアの概念に関する先行研究の検討が行われ、第二部では介護老人福祉施設の職員、利用者のそれぞれの語りの分析からケアの概念を明らかにすることが試みられている。そして、第三部では調査研究によって明らかにされた介護現場におけるケアの概念を用いた職員研修プログラムの実施と評価を通じて、介護職員に対するケア概念教育の必要性について検討が行われている。

(1) 第一部

序章において、高齢者福祉サービスの営利化が介護現場に及ぼす影響について、先行研究やサービス提供事業所の管理者の語りから考察が行われている。そこでは、他事業所との競争関係から顧客確保に重点を置かざるを得ない事業所の実情から、本来求められる自立支援の観点ではなく、顧客の要望に偏重した支援が強いられ、相談援助職員や介護職員の職業的アイデンティティー

の低下や労働意欲の低下を招く恐れがあることを指摘している。このような状況に対して、著者は、介護の質の向上のためには、人材や介護体制の整備という視点だけではなく、援助の価値や思想といった哲学・思想レベルのケアについて介護職員が理解することが必要であると主張する。一方で、現在の介護福祉士養成課程のカリキュラムには価値、思想、倫理に関する教育が不足しており、介護職の道具的援助の側面が重視されていると述べている。そこで、本書では3つの目的を提示している。第1に、介護職員と利用者双方の関わりの認識から、両者間で展開されるケアの概念を明らかにすること、第2に、そこで明らかにされたケアの概念を用いた研修プログラムを実施し、その研修を通じた介護職員の認識の変化についての分析から、介護職員がケアの概念を理解することの意義を考察すること、第3にケアの概念の教育、研修方法とその課題について考察することとしている。

次に第1章では、ケアの概念について、メイヤロフ(1971)を中心に先行研究の批判的考察を行っている。そこで、本書におけるケアの定義を「相手にとって良好な状況に向かうよう、相手の状況に応じた気遣い、援助をすること(ケアをすること)、また、相手から自分にとっての良好な状況に向かうよう、自分の状況に応じた気遣いや援助を受けること(ケアをされること)を通して、互いが内的充実感を得て、成長していく過程」(p.39)としている。また、ケアにおける成長を『「相手を気遣い助けたり、相手から気遣われ助けられる過程で得た経験や考えを自分なりに統合し、自己に対する認識を高めること」さらに、「他者による全人的な受容などによって絶対的な安心感を得て、こだわりや不安から解放されること』」(p.39)と述べている。さらに、筆者は「メイヤロフが指摘していない、自己意識を明確に持つことが困難とみなされがちな人々のケアされることによる積極的な意味での内的変化も」この成長という言葉でとらえ、言わば重度の認知症を抱える人や寝たきりの状態にあり意思の表示が困難な状況にある人も含めた、介護現場におけ

るケアの概念を明らかにする必要性が述べられている。

第2章では、看護、介護福祉領域におけるケアの概念に関する先行研究の丹念な検討が行われ、その結果、看護領域に比べて介護福祉領域における研究の未成熟さを指摘し、ケアとは何かについての具体的な研究の取り組みの必要性を述べている。また、ケアは、「看護でも介護福祉でも、対人援助に関わる領域すべてに通底する思想、価値である」(p.84)とし、介護の上位にある概念であると述べている。

(2) 第二部

ここでは、介護老人福祉施設で働く介護職員及び利用者それぞれ15名に対するインタビューデータの質的分析によるケアの概念の検討が行われている。

介護職員に対しては、利用者との関わりの認識と、対応困難な利用者との関わりについての語りの分析から、援助者である介護職員が、利用者を一方的に支援する存在ではなく、利用者からも心配されたり、助けられたり、必要とされ信頼されることが喜びや励みにつながり、さらに、利用者により良く知っていくことや、一緒にいることなどが喜びや充実感につながっていることを明らかにしている。

利用者に対しては、介護職員について思うことや、普段の生活を振り返って、印象に残っている関わりや、自身の気持ちの変化、などについての語りの分析が行われている。そして、利用者は介護職員との関わりを通じて、自身を理解し、受け入れてくれることに喜びや安心感などを得る一方で、時に自身を受け止めてもらいたい、率直に考えを伝えてほしいなどの気持ちを持つことがあること、さらに、介護職員から学ぶことや共感を持つこと、介護職員の未熟さを許容したり、時には相談に乗ったり助けたりすることが、利用者の良好な内的変化につながっていることを示している。

さらに、介護職員と利用者のお互いの関係性の認識についての語りの分析から、かかわりの時間

の経過とともにお互いの関係性が近くなり、親しみを感じることで、また一方で職員は利用者との関係に親密度が増すに従い、他の利用者との公平性が保てなくなるのではないかと危機感も感じていると述べている。さらに、介護職員と利用者ともに、相手に対して相性があると感じ、親密さの低い関係性も存在することも示している。

これらの一連の分析を基に、介護現場におけるケアの概念を「相手のことや抱える痛み（脆弱性）を知り、共感することによって、相手にとっての良好な状況に向かうよう働きかけたり、同様な経緯で自分が相手から働きかけることから始まる相互の関わりの過程において、相手から自分の存在や独自性を認められたり、信頼されることによって、自分に対する信頼や安心感を得たり、相手の存在を認め、信頼すること、また、相手に自信や安心感を与えようとするを通して、その中で得た経験やその意味を自らに統合し、新たな価値観や指針を獲得したり、自分の居場所を得て現状を肯定できるようになったり、相手にとっての良好な状況へ働きかける意欲を高めるなど、その人にとっての良好な状況に向かって変化していくこと」(p.217)と説明している。さらに、『「ケアされる」ことによる「場の中にいること」が成立すること』(p.219)、そしてこの場の中にいることを利用者が感得することの重要性と、重度の認知症で意思疎通の困難な寝たきり高齢者に対しても、その人にとっての良好な状況に向かう内的変化の可能性についても述べられている。

(3) 第三部

ここでは、研究によって明らかになった介護現場におけるケアの概念に基づき、介護職員10名に対して研修プログラムを実施し、事前と事後のインタビュー、アンケート等をもとに質的分析により、介護職員がケアの概念を学ぶことの意義について、さらにこのケアの概念を介護職員にとって負担が少なく取り組みやすい研修のあり方について考察が行われている。

その結果、研修に参加した介護職員の実践場面においても、先の調査で明らかになったケアの関

係性が存在していた。しかし、研修参加者が利用者からの感謝や気遣いに気づいていない場合があることなどから、研修を通じて介護職員の意識の変容と、それによる仕事への意義を得ることの大切さが述べられている。

最後に、本研究で明らかになった「哲学・思想的レベル」のケアを「臨床的・技術的レベル」のケアに浸透させる必要性、そしてそのために「制度政策レベル」のケアにおいてもケアの概念が制度や組織の理念として機能し、単に道具的な援助に終始することがないような環境整備の必要性が述べられている。

3. 評者コメント

以下3点コメントを述べる。

まず、著者は介護保険制度の施行により、介護サービスの提供に市場原理が導入され、そのことによって介護職員と利用者との間に、効率性や顧客満足増進の視点が増強され、介護労働者と消費者という主従関係とも言える状況が生まれることへの懸念を述べている。このことが、著者が定義する介護職員と利用者の対等な関係に基づく相互作用による両者の成長のプロセスとしてのケアの成立を危ぶむ状況を作り出していると理解できる。しかし、評者の理解では、介護保険制度開始以前においても、介護サービスの提供現場においては、利用者を主体とした寄り添う介護や生活の場という考えの基に個別の支援が追及されていた一方で、身体介護を手早く行うことを良しとする介護の効率性や、安全性の視点に偏重した安易な身体拘束も多くの施設で常態化していたことを考えると、どれだけ利用者の心に寄り添った支援を行うことができていたのかという疑問もある。そのため、著者が主張するケアの概念を介護職員が理解する意義は、介護保険制度以前から現在にかけて普遍的にあると考える。

次に、著者は、「哲学・思想的レベル」のケアを「制度・政策レベル」、「臨床的・技術的レベル」のケアとは区別して「ケア」と表現している。これが本書で取り扱っている「ケアの概念」

である。また、この「ケア」は、介護の上位概念と説明している。そして、「ケア」の定義づけが丁寧になされている。しかし、ケアという言葉の本来持つ多義性からくる混乱、例えば、高齢者ケアや高齢者介護、ケアサービスと介護サービスなど介護とケアが同義として用いられる場合や、ケアを思いやる、気に掛けるなどの場合に用いる場合、などからケアと介護という二つの言葉の違いに戸惑う人は多いと思う。また著者による「ケア」の定義は、「相手にとって良好な状況に向かうよう、相手の状況に応じた気遣い、援助をすること（ケアをすること）、また、相手から自分にとっての良好な状況に向かうよう、自分の状況に応じた気遣いや援助を受けること（ケアをされること）を通して、互いが内的充実感を得て、成長していく過程」（p.39）と述べているように、ケアという言葉が多様な意味で用いられている。この点については、著者の研究で明らかにされた内容を介護職員に分かりやすく伝えるうえで、支障はなかったのであろうか。介護職員に対する研修プログラムについて、本書の中で説明が行われているが、この「ケア」の概念と、介護現場で用いられている介護やケアといった言葉との違いについて、どのように説明が行われ、介護職員の反応はどうだったのか興味を持つ。イメージとして図による説明の必要性や、インタビュー調査や教育プログラムの実施を経て、用語の使用についての著者が考える課題があれば伺いたいと思った。

介護を提供する人と受ける人との間の相互作用による、お互いの成長に影響を与えるという「ケア」の概念を、本書では見事に介護職員と利用者

の関わりの認識（語り）の分析から明らかにし、さらに介護職員がこの概念を研修で学ぶことによる効果を提示している。本書で明らかにした「ケア」の概念は、介護職員だけでなく、家族介護者にも通じるものである。評者が行った、在宅介護を行う家族の語りの質的分析（石附、2016）では、重度の要介護高齢者を介護する家族が在宅介護を継続することに影響を与える要因の一つに、「気持ちの交流」という概念がある。これは、家族介護者が介護を継続する上で、要介護者本人が何らかの反応を返していることが、家族介護者の励みにつながっているというものである。ただし、本人が意思の表示ができない場合でも、介護者がその思いを受け止めて好意的に理解しているという場合も含まれていた。この点は、本書において著者が明らかにした、意思を表示することが困難な人に対しても、「ケア」の概念が適用できるということに関連していると考えた。こうした概念を家族介護者が学ぶことの効果についても、検討する意義があると思う。

本書で提示された「ケア」の概念が、あらゆる介護の実践現場で、その妥当性が確かめられ、発展していくことを期待したい。

引用文献

- Mayeroff, M. (1971) On caring, Harper & Row. (= 2003, 田村真・向野宣之『ケアの本質－生きることの意味』ゆみる出版.)
- 石附敬 (2016) 「重度要介護高齢者の在宅介護を長期に継続する要因－家族介護者インタビューの質的分析－」『東北福祉大学研究紀要』40, 1-18.